# 高等専門学校の機能強化に関する検討会（第6回）議事録

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/136/gijiroku/mext_00005.html

記事ページ本文



高等専門学校の機能強化に関する検討会（第6回）議事録

1．日時

令和8年10月21日（水曜日）15時00分～17時00分

2．議題

これまでの議論について

協力者発表（柔軟な学修、実践的な語学教育）

高等専門学校の機能強化について（素案）

その他

3．議事録

【谷口座長】 それでは，時間となりましたので，ただいまから第6回の高等専門学校の機能強化に関する検討会ということで開催させていただきます。

今日は本当にお忙しい中お集まりいただきましたこと，まず感謝申し上げます。

では，開催に当たって，この検討会の留意事項といいますか，事務局のほうから御説明を簡単にお願いしたいと思います。

【佐藤課長補佐】 事務局でございます。

本日は坂口委員が御欠席となってございます。また，五十棲委員，若原委員におかれましては，オンラインでの御参加予定となってございます。

続きまして，留意事項について御説明いたします。

傍聴の方々には，モニターの画面を共有しまして，YouTubeでの御視聴をいただいている状況でございます。御説明，御発言に当たりましては，都度お名前をお伝えいただきまして，オンラインでも聞き取りやすいよう，ゆっくりはっきりとお話しいただけますと幸いでございます。

また，投映する資料等を御参照される場合には，資料番号やページ番号，ページの該当箇所等を分かりやすくお示しいただけますと幸いでございます。

資料については，今お配りしている議事次第のとおりとなりますけれども，不足等ございましたら事務局のほうまで御連絡ください。

以上となります。

【谷口座長】 ありがとうございます。

では，もう早速，議事のほうに入らせていただきたいと思います。議題の最初は，そこにも出ていますけれども，第5回までやらせていただきましたけれども，これまでの議論等についてということで，まとめたものを簡単に御説明いただくという形を取れればと思いますので，事務局のほうからお願いしていいですか。

では，松本課長，お願いします。

【松本課長】 資料1を御覧ください。

1ページ目でございます。前回，第5回の検討会における主な意見の概要でございます。
まず，高専新設に関しましては，質保証の観点からも，ディプロマ・ポリシーに基づく教育課程を明確化すること，それから，産業クラスターや自治体と連携し，地域インフラや産業を支える人材を育成することとともに，地域における高専の人材供給機能を明確化することが重要ということが言われております。また，地域企業との接点の拡大や，学修成果の見える化により，卒業生の地元定着を促進することが重要であるとの御意見をいただいたところでございます。
また，新たな分野に関しましては，既存分野との融合を図り，分野横断的な視点を備えた人材，それから，大学や産業界との連携の下，到達目標や評価目標を明確化すること，また，新たな分野に対応した教育モデル構築のための支援が必要との御意見をいただいております。
実務家教員に関しましては，学術的知見を有する教員と実務家教員が連携・補完し合う教員の体制を構築していくことの重要性，それから，多様な人材が教育に参加しやすい仕組みをつくっていくこと，また，クロスアポイントメント等の多様な雇用形態や柔軟な教員配置を進めるとともに，教員人材の育成・確保や処遇改善を検討していくことが重要との御意見をいただいております。
続きまして，資料1の2ページ目を御覧いただければと思います。こちらが本日の議論のために一応御用意させていただいた論点ということになります。前回に引き続きまして，国公私立の各高専における取組等も踏まえて，御議論をお願いできればと存じます。
1つ目は，高専教育の質と特色を維持しつつ，入学後の興味・関心の変化や進路希望の変更への対応，また，大学との円滑な接続，海外留学の促進，主体的な学修機会の確保，学びのセーフティネットの確保，社会や産業構造の変化に対応した教育課程や学修の在り方への対応等の観点から学修の柔軟性をどのように確保していくべきか，また，現在行われている取組はどのようなものかといったところを御議論いただいてはどうかと考えております。
資料として，3ページ目が現状の我が国の教育資格枠組み，4ページ目が，議論の中で出ると思われます学年制による教育課程編成等ということで，今の学校教育法の施行規則の関係，5ページ目は高専の設置基準，6ページ目が海外交流の状況について掲載させていただいております。
私からの御説明は以上です。
【谷口座長】 ありがとうございました。
今まで5回の検討会をやらせていただいて，最初に，第5回，前回の検討会におけるいろんな御意見，高専の新設であるとか，新たな分野をどういうふうにしていくか，あるいは，実務家教員にどういうふうに入っていただくかというようなことを含めて，皆さんから割とポジティブな方向でのいろんな御意見をいただいたのを簡単にまとめていただいたということがございます。
この前回までのまとめ，こういうことでよろしいですかね。特別，何かこれが抜けているよとかというのがありましたらご指摘いただければと思いますが，よろしいですね。
では，こういう形で，進めさせていただきます。だんだんまとめていかないといけませんから。
それで，5つほど課題があるという形でやってきましたけど，3つまでを前回やらせていただいて，今回は4つ目，5つ目ということで，今日は高専教育について議論を少しいただくということの続きだと思っていただきたい。
簡単に言えば，一つは，卒業生は，国際的にもちゃんと活躍していただかないといけないというようなことがある。それに関連して，外国語の問題であるとか，あるいは，若い人が入ってくるんだから，せっかく高専に入ってきたけど，ちょっとマッチング悪いよというようなことに対しての対応というのを，今も進路変更はできるんですけど，それをより明確にして，ほとんどの人は所期の目標に従ってやってくれていると思いますけど，もし何か進路変更の希望があったときでも，別にそれは悪いということではないので，そういうところもちょっと整理しておいたほうがいいのではないかということです。また，高専も高等教育機関の一つですから，基本的な教育というか，一般教育というか，教養教育と，いろんな人の取り方によって表現はちょっと違うかもしれませんけど，いわゆる教養教育的なものもしっかりやっておかないとということがあります。
これから時代が随分変わってきますから，そういうことも上手に取り入れながら，かといって，何か授業をわっとやればいいかというと，そうでもなさそうということもありますので，一般教育とか語学の教育，あるいは，今までの様々な取り組みを制度的に少し整理しておいたほうがいいよというようなことについて，今日，御議論いただければいいかなということで進めさせていただきますけど，よろしいですね。
【松本課長】 よろしいですか。
【谷口座長】 どうぞ。
【松本課長】 現行制度でも，今，谷口先生からお話あったとおり，一定の柔軟な学修は対応可能と

なっているんですけれども，先ほどの資料1のほうを再度御覧いただければと思いますけれども，その観点で申し上げますと，海外留学や長期インターンシップ等に参加する学生について，留学先などでの学修成果を適切に評価できる場合であっても，学年配当された必修科目との関係で履修計画の調整が必要となる場合ということがあるのではないか。
それから，企業・地域との実践プロジェクトや起業活動等，一定期間を要する学外での学修を教育課程に組み込む場合に，こういった期間に履修する科目との関係で履修計画の調整が必要となる場合ということも考えられるのではないか。
また，特定分野において高い能力を有する学生が，上位の学年相当の科目の先行履修や大学ですとか他機関における学修に取り組む場合に，学年を基本とした現行の教育課程との調整が必要となる場合，こういったものがあるのではないか。
それから，PBL，海外留学，長期インターンシップ，大学等との共同教育プログラムなど，学生の主体的な学修を重視した多様な教育活動を教育課程に各高専で位置付けていくに当たって，学修単位科目の上限が制約となる場合があるといった声も我々，聞こえてきておりますので，そういったところもあるかと考えておりますので，こういったところも含めて，校長先生方もいらっしゃるので，御議論いただければと思います。
【谷口座長】 ということで，要は，人を育てないといけないので，そのための規則なので，それが本末転倒にならないようなことを考えながら，かといって，いいかげんに何でもやっていいというわけではないというバランスの中でうまくやりながら，人がどうやったら育つかと，学生さんが次の時代に活躍できるように育てていかないといけない，そういうことを柔軟に考えていかないといけないということを頭の中に置きながら，どういうふうにやっていけばうまくいくかということです。これは日本の将来がかかっていますから，世界の将来と言ったら大げさかもしれないけど，これからの人材育成には将来がかかっている，また，世の中が大分変わってきている，その中でいろいろと考えていかないといけないということを御理解いただきながら，今日，議論できればと思います。
特に先に聞いておいたほうがいいというのはありますか。よろしいですね。
それでは，今日は，先ほども言いましたように，外国語の問題であるとか，要するに，国際的に，とにかく今，若い人はどんどん世界とつながっていますから，そういうものとのつながりを意識した上で，あるいは，いろんな取組に関して，今日特別に協力者の発表というのをお願いして，秋田高専から坂下校長先生，それから西野副校長先生にここまでお出ましいただいて，一つの高専の取組という形で御紹介いただければと思います。各学校，いろんな取組をやっておられますが，そのうちの一つだということでお話しいただいて，その中で，こういう課題があるよというのがもしあれば，またそれもお話しいただくということにさせていただいて，まず秋田高専のほうから御説明いただきたいと思いますが，10分ぐらいのところをめどにお話しいただくとありがたいと思います。
では，西野先生にお願いしていいですか。
【西野副校長】 御紹介ありがとうございます。
本日，このような機会で発表させていただきましてありがとうございます。私，秋田高専の副校長，国際担当をしております西野といいます。どうぞよろしくお願いいたします。
まず今回は，地方の一高専，秋田高専における英語教育と海外連携というようなことについて発表させていただければと思っております。
最初に，本校がグローバル化や英語教育に注力している背景についてお話しさせていただければと思います。
まず，製造業の約半数が「英語能力を有する人材の不足」を成長上の課題と挙げるなど，英語で技術を議論・説明できる技術者が強く求められています。
これに加え，本校が位置する秋田県では，現在，洋上風力発電をはじめとする再生可能エネルギー分野のプロジェクトが急速に拡大しています。秋田がグローバル拠点となっているということです。
このようなことから，工学知識だけでなく，海外エンジニアと対等に渡り合える実践的英語力を兼ね備えた技術者の育成が強く期待されているという状況にあります。
このような背景の下に，本校では，「5年間のうちに1度は世界へ挑め」というようなスローガンを掲げまして，主にこちらに示しています5つの柱でグローバル人材の育成に取り組んでいるということです。
1つ目が，段階的な語学教育となります。
本校では，専門教育を土台に，学年が進むにつれて「英語を学ぶ」，これから「英語で学び，海外で実践する」へというような形の育成マップの作成をしております。
まず最初に，1年生では，海外への興味・関心を高めるということで，知的好奇心の刺激を行った上

で，2年生では，希望者のみとはなりますけれども，国際教養大学と連携しまして，2泊3日の国内留学をして基礎力の育成に努めております。
その後，英検やTOEICなどを単位修得条件へ組み込み，さらに，学年に応じて目標スコアを段階的に設定することによって，着実にステップアップできる学修環境を整えています。
その成果の一つとして，こちらの右側のほうにお示しさせていただきましたが，TOEICの平均点となります。秋田高専の平均点が2025年で491点ということで，全国平均と比べても約100点近く能力の高い結果が出ているということとなります。
2つ目として，多様な海外研修を設けています。
研究実践型，あるいは，英語研修型，学生交流型となります。
ここでポイントとなるのは，他高専・他大学との連携による多様なプログラムということとなります。例えば，研究実践型では，東北・北海道地区のコンソーシアムを通じて，そして，フランス／フィンランドなどへ学生派遣をしたり，あるいは，本校が主催として実施しておりますシンガポール英語研修では，他高専などから学生を受け入れたりして行っております。また，モンゴル交流研修のほうは，こちらは秋田県立大学と共同実施をしておったり，台湾研修では，海外で働くOB／OGと連携しまして，協力をいただきながら海外工場見学を実施しているということとなります。
こちらがその結果となるわけなんですけれども，右側の海外派遣学生数の推移といたしましては，2025年には79名，今年度は85名が見込まれまして，さらには，本校が主催として他高専からもいろいろ参加してもらっていますので，それを含めると，100名を超える学生を海外に送り出しているという形になります。
ただ，一方で，全員海外に行かせるというのはまだとても達成できている状況ではなくて，右下のほうになりますけれども，秋田高専の海外研修のPR動画などを作って，これをきっかけに学生インフルエンサーが教室の中でいろんなほかの学生に広めていったりだとか，あるいは，相互交流を実施しておりますので，海外に行った学生が，今度海外から来るときには，その経験を基に，ほかの日本人学生を巻き込みながら海外の人たちを受け入れるというようなことを通じながら，いろいろ海外の敷居を少し下げて参加を促していこうというような取組を行っております。
3つ目が，キャンパス内の国際化ということとなります。
先ほどの全員を海外に派遣することが現状では容易でないものですから，キャンパスの中で日常的に異文化交流が感じられるようなことで取り組んでおりまして，例えば，ここに挙げたように，フランス／フィンランドから3か月研修を受け入れたり，タイ高専から1か月研修を受け入れたり，シラパコーン大から交流プログラムを受け入れたり等をしております。
最初に，一番最後のKOSEN Global Campのことについて御説明させていただきます。
こちらのほうが，高専生と海外学生が1週間，例えば，ブレインストーミングを一緒にやったり，フィールドワークをやったり，グループワークなどをやるなどして，英語で受講するプログラムを実施しております。先ほどの洋上風力というようなことで，再生可能エネルギーを活用した地域共生と活性化をテーマに，タイやモンゴル，シンガポールから留学生を含む24名に参加してもらって，今年3月に実施したものとなります。
また，タイ高専プロジェクトの1か月研修は，現在進行中なんですけれども，ちょうど今来ているところですが，2026年度は24名の学生が本校に来校して，その中でプロジェクトワークや専門授業というような形で，タイ高専単独ではなかなか難しいだろうと思われるAIによる顔認証実習や，マイコンを用いた自立型トレースカーの製作，あるいは，タイにも拠点を持っているようなグローバル企業の見学をしたり，また，下のほうにありますが，学内交流イベントやタイフェアなどを併せてやって，キャンパス全体，学生全員が，今タイ高専の人が来ているんだというような雰囲気を熟成するような形で，盛り上げているような形の取組も行っております。
先ほども話が出ていたかと思いますが，長期間の海外留学に挑戦したいという際に，障害となるのが留年のリスクとなります。本校では，5年後期に5か月間の留学を認めているんですが，これは5年生の授業を前期に集中させるというようなことで実施しているものとなりまして，今年度はフランスだとかフィンランドのほうに実際に留学しているということとなります。
5つ目としては，専門教育と連携した実践英語教育となります。
本校では，短期留学生のほうは研究室で受入れを行っております。ですので，海外から来た留学生と専攻科生あるいは卒研生と一緒になって共同研究を行ったり，プレゼンの練習を行ったりというようなことをやったり，取り組んだり，あるいは，指導体制といたしましては，各専門系に1人以上の海外国籍をお持ちの方，あるいは，海外派遣経験のある教員が在籍していますので，そのような先生を活用しながら，例えば，専門英語単語を英語のほうと併用しながらやったりというようなことをやり

ながら，実践教育というようなことを取り組んでおります。
次に，これらの取組を支える支援制度について御説明させていただきます。
カリキュラムと単位認定を認めていくことに加えまして，経済的なハードルを下げる工夫といたしまして，高専機構のほうからいただいています補助制度を最大限活用するほかに，本校のグローカル人材育成会のほうから奨励費などを出していただきまして，意欲と能力のある学生に対しての助成を積極的に行っているということとなります。
また，日本型高専の導入支援といたしまして，タイへは本校教員2名をそれぞれ2年間派遣しておりまして，現在も1名タイに在籍しております。
モンゴルでは，こちらは学生交流中心とはなりますけれども，日本語でのオンライン交流会の実施などを行っております。
また，ベトナムのほうは，これはちょっと恐縮で，大変古い話となって申し訳ありませんけれども，JICAプロジェクトの長期専門家として2名がそれぞれ1年間派遣するというような実績がございます。
高専機構などとも連携した取組を行っております。
高専機構主催の「KOSEN国際化シンポジウム」，こちらのほうは秋田高専で昨年開催したり，あるいは，本校で実施されている1年生の英語教育のプログラムを他高専の皆様に御覧いただく「グローバルエンジニアプログラム公開授業」というのを開催いたしまして，ノウハウの共有などもやっているというところとなります。
今後の課題といたしましては，まだまだやるべきことが多くて，例えば，引率教員のほうを，もうちょっと敷居をいろいろ下げながら，一部の教員ではなくて，いろんな人に関わってもらいながら進めていきたい，サポーターになってもらいたいと思っておりますし，本校では専任の日本語教員がいないということで，留学生などのサポート体制をもうちょっと強化していきたいと考えておりますし，教員がやろうやろうと言っても，やっぱり学生主体の取組をもっと増やしていかないと駄目かなと，学生が自ら，やっぱりこんなことをやりたいんだ，ここに行きたいんだとか企画してもらえるようなところまで行けるといいなというようなことを考えております。
今後も，高専機構をはじめ，関係機関や海外協定校と連携しながら，より一層の英語教育の高度化と国際化に貢献していきたいと思っておりますので，引き続き御支援と御指導のほど，どうぞよろしくお願いいたします。
以上となります。ありがとうございました。
【谷口座長】 どうもありがとうございました。いろんな取組を丁寧に詳しくチャレンジしているよという様子がよく分かりました。
この間，少し遅れてですが，若原委員とか五十棲委員も会議に入られましたのでご報告します。
今，秋田高専の取組というか，こんなことをやってるよという御紹介がありましたが，今のお話に対して何か御意見，あるいは，ここどうなってるのとかいう御質問ありましたら，お受けしたいと思います。
萱島先生からいきましょうか。
【萱島委員】 大変興味深いお話，ありがとうございました。
5年間のうちにできれば必ず一度はということで，ただ，今全てにはなっていないんですというお話もあったかと思うんですが，5年間に一度は行く学生が何％ぐらいなのかというのが一つと，もう一つ，帰ってきて，そうすると，学生の雰囲気だとか意欲が随分変わったなというのを実感されるようなことがあるのか，その辺りのお話を伺えたらと思います。
【西野副校長】 1年間に80名程度と今本校ではなっていますので，本校の学生のちょうど半分という。その80名が5年間で。
【谷口座長】 延べとしては400人ぐらいになるから，学生数は，全体で800人ぐらいですから。600人，800人の学生のうち400人。
【西野副校長】 半分ぐらいの学生が。だから，5割というところで，道半ばというところです。
ただ，やっぱりコロナ禍のときの状況から抜け出して，帰ってきた学生が，やっぱり楽しかったとか，さらには，先ほどのショートPR動画みたいなのを見ながら，何か面白そうだなというような形で，どんどん興味を持ってくれる学生が増えてきて，「先生，来年どんなところがあるんですか」とか，そういったところは変わってきたのかなと。一方で，80人ぐらいでサチっているというか，これから超えれば，またさらに違うきっかけ，取組がもう一歩必要かなというようなところは考えているところでございます。
お答えになっていますでしょうか。

【萱島委員】ありがとうございます。
【谷口座長】サポートの限界もあるから，何でもかんでも，ちょっとはできるけど，完全にというのはできないから，その分もやっぱり限界も出てきますかね。いろんな御家庭の事情もあるということもちょっと入るかもしれませんね。
柴崎委員はどうですか。
【柴崎委員】うちは寮がないもので，留学生などの受入れはできていないんですね。それで，受け入れるときというのは，日本語がこれぐらいできるとか，何か敷居はあるんですか。それとも，全然ない感じになりますか。
【西野副校長】N2を取っていただくとうれしいなというところでございます。でも，実際は，N3だとか，相当というような学生さんで，本校も国際寮のほうがあるんですけれども，なかなか海外の学生が自由に使えるような環境は。もともと日本人だったり，非入学生のほうが使ったりというような形があって，かなりそこでいっぱいいっぱいになっていますので，海外からお越しいただけるときは，ちょっと申し訳ないけど，ホテルのほうに滞在してもらったりというようなことも多くございます。
現在タイ高専から24名来ていますが，24名のそのタイ高専の学生も，ホテルを利用していただいている状況でございます。
【柴崎委員】そこはもう契約してお願いするような感じということで。
【西野副校長】はい。
【柴崎委員】どうもありがとうございます。
【谷口座長】竹内委員はどうですか。
【竹内委員】大変積極的で，感銘を受けました。
今，寮のお話あったんですけれども，私も高専で5年間寮にいて，いろいろ学ぶところもあったんですが，多分，最近，国際化をやっている大学なんかだと，日本人の学生と海外から国費留学生なんかで来た学生を同じ寮に入れて，生活環境自身を一緒にしていくことで国際化を進めようというのをいろいろやられていると思うんです。現在のキャパの話はあるかもしれないんですけれど，例えば，1号棟なら1号棟だけ，日本人と外国から来られた方を半々とか2対1とかにするようなことがもし可能であれば，一層ふだんの生活から含めて交流が進むようなことがあるかなという気はしたというのが一つ。
それから，高専の学生で，例えば県立大学なんかだと，よく完全な英語授業で，レポートも英語で書いて，ふだんから全部英語でやっているような大学も，会津とかあると思うんですけれど，何となく高専だと，国際に出ていくぞという人材と，いや，俺はまるドメで，もう兼業農家で，地元で日本語だけでいいんだというのも一定程度いてもいいような気がしていて，100％というのはあまり追求し過ぎると，そういった学生がかえって高専行かないよみたいになっても逆効果かなという気がしておりまして。
ですから，国際をやってみたい，やろう，やりたいという方はもう全員こういうのを使えるというのがすごくいいと思うんですけれど，100というのがちょっと，入学のときにどこまで意識して入ってきているかなというのがちょっとあると思います。
あともう一つだけ，これはコメントですけれど，やはり5年生で前期課程に授業を全部押し込めようとすると，学年制との関係で，確かに留年とかいろいろ編成が厳しくなってくるので，例えば4年・5年のところを単位制にするとか，例外規定を制度上考慮して，これは文科省で決めていただかなければいけないと思うんですけれど，5か月というとかなり長期なので，単位数にかなり影響を与えるので，1年だけで吸収しようとすると確かにかなり難しいと思いますし，留学に行っている人と行っていない人で，行っていない人は5か月何してみたいなところもどうするかみたいなのが全体としては出てくるような気がしますので，これはもう5か年全部単位制にするか，4年・5年のところだけ単位制みたいなものを考えるかみたいなものも，やってほしいというお気持ちがあるのかどうかだけお聞かせいただければありがたいと思います。
【西野副校長】今本校で取り組んでいるのが，最大5か月でできますよということなんですけど，一方で，1年間行きたいという学生も，やっぱりそういう雰囲気が生まれてきていまして，本当にそういうことを質問してきたりする学生が学年に1人とか2人出てきていますので，そういう1年間行っても留年しない，あるいは，下手すると，9月に海外のほうに出かけると，本校の現状の制度では2年遅れたりするケースが出てきますので，そこは制度をうまく活用できるようになるといいかなとは思っておりますので，ぜひそのようなところもまたよろしくお願いしたいと考えております。
【竹内委員】ありがとうございます。

【谷口座長】制度的なことは少し工夫をしないと，半期の間学校を離れてというようなやり方も一生懸命頑張ってしておられるんだけど，それだけでは済まない面もやっぱりあるかなというところはありますよね。
小島さん，どうですか。
【小島委員】サレジオ高専の小島です。
本当に5年いる間に一度でもいいので海外を経験させたいという，その目標は大変いいなと思って聞かせていただきました。それからまた，そのために学生たちの興味・関心を刺激するため，いろいろな取組をされていて，本当にすばらしいなと思いました。
一つお聞きしたいのは，先ほど竹内委員からもありました，16ページにあります5年生の授業を前期に集中させるというのと，あともう一点は，卒業研究が，恐らく通常コースの子に比べて時間数が足りていないように見えるんですが，そこら辺の御指導というのはどのようにされているのかなというのを聞かせていただければなと思いますけれども，よろしくお願いいたします。
【西野副校長】5年生の授業を前期に集中させ，後期のほうを卒業研究がメインの授業にしていますけど，やはりどうしてもそれでは収まり切れません。ですので，後期も通常の事業を実施しており，可能な範囲でオンラインというような形で。時間帯がやはり時差の関係がある場合は，一部録画をするなどして，できるものはする。さらには，帰ってきてからの集中講義的なもので補うなど取り組みながら，やはり難しいところの授業に関しては，そのような形で実施をしている形になります。
【小島委員】いろいろ御苦労されているんだなという感じで。
【谷口座長】いろいろ工夫をしないとしょうがないから，これはもうできる工夫をいろいろしておられるんだろうと思いますけどね。
【小島委員】ありがとうございます。
【谷口座長】じゃ，画面の向こうのほうで，五十棲委員，御質問ありますか。
【五十棲委員】ありがとうございます。
これ，文科省さんの資料ではなくて，秋田高専さんへの質問で。
【松本課長】どちらでも結構です。
【谷口座長】まず，秋田高専のほうに聞いてください。
【五十棲委員】じゃ，秋田高専さんのほうへの質問という意味で。
ありがとうございます。我々，まだ5年生がいない学校ではありますけれども，大変参考になる取組で，我々もぜひいろんな形で参考にさせていただきたいなと思いました。
質問としては，まず5年生，5か月行かれる方に何か特徴ってあるのか。例えば，編入を前提としている方，専攻科に行かれるような方のほうが行きやすいとか，就職の時期と結構かぶってくるのかなとか思っていたりするんですけど，そこら辺，何か属性的な特徴，逆に言うと，例えば，先ほど単位制の議論がありましたが，4年生とか3年生でも行けるようになると，就職を前提としているような方，別の属性の方々も行きやすくなるとか，そういったことがあり得るのかということが1つ目です。
2つ目は，5か月海外，あるいは，国内も含めてですか，学ぶというのは，結構高専の中で学んでいるのとは違う大きな学びはあると思うんですけれども，こういったものを単位認定するみたいなことはやられていらっしゃるのか，それとも，全く卒業単位の外の世界で処理をされていらっしゃるのか。ここら辺，あるいは，これ，単位認定できたら，それはすごく有効である，仮にしていない場合には，それを単位認定できることがあるのであれば，それはポジティブなのか，もしできていないのであれば，何が課題になっているのか，そういった辺り，もし伺えればありがたいと思いました。
【西野副校長】ありがとうございます。
5年の後期の，こちら私たちのほうは「グローバルエンジニア実践研修」と呼んでいますけれども，こちらのほうに参加している学生の属性というと，なかなかいろんな学生がいますので，難しいところはあるかと思うんですけれども，実績からすると，専攻科に進学した学生は1人で，ほとんどが就職しているのが多いです。5年生の後期に出発しますので，就職活動とは，基本的にはもう進路を決めた段階で出発するというような形を取っているので，就職活動あるいは進学活動などにはあまり影響ないような形での取組ができているのかなというふうには思っております。
あと，単位認定に関しましては，英語研修と言われている，シンガポールのほうに行った学生は，英語の単位にしたりだとか，あるいは，それ以外の非英語圏のほうに行った学生は，社会系の科目のほうの単位を認定したりというようなことで，レポートを提出させたりとかも併せながら，そういう形で認めているような状況となります。
【五十棲委員】ありがとうございます。

逆に言うと，進学する学生とかは，受験の時期と結構重なるので，少し行きづらいという形でしょうか。
【西野副校長】少ないのは，そういうことが関係しているかとは思っています。
【五十棲委員】ありがとうございます。
【谷口座長】いいですか。
じゃ，若原委員，どうぞ。
【若原委員】私，2点ほどあります。
今，本学で実施している5か月の海外・国内での実務訓練で，単位認定しています。期間としては，我々も海外に実動訓練へ出しているときに，2か月だと短い，5か月から半年ぐらいは欲しいと言われて，いろいろ苦労したんですけれども，このときに，海外留学する学生さんは，現地へ行って何をしてくるかという課題をはっきり決めて行かれていると思います。卒研で身につける経験と対比したものがあれば，特段海外留学を卒研の一部とみなすということについての問題はないと思います。この点についてはどのような扱いをされているんでしょうかというのが1点目です。
まず，1点目だけお願いします。
【西野副校長】ありがとうございます。
海外で何をやってくるかというと，全部ではありませんけど，やはり向こうで研究というような形で，向こうの研究室のほうに入れさせてもらって研究を行って帰ってきていますので，その内容を本校に帰ってから卒業研究発表会などで，本校の日本人，普通の学生と一緒に発表してもらったりしまして，その内容について卒研というような形で評価しているという形になっています。
やはり足りない学生などもあります。最大5か月間ですので，3か月とか4か月で帰ってきた場合は，残りの時間を使ってテーマを2つやったような，そういうような形で，海外でのものの発表を8割ぐらいして，残り2割程度を国内でやったものを合わせ技で単位を出しているというような形になります。
【若原委員】分かりました。
卒研の目的の一つに，研究開発のスキームをつくるとか，ある方法論をどうやって現実の開発・研究の場に適用するかという視点の能力を身につけたことを評価するならば，海外の研究開発の仕方は，日本と違う場合もありますので，卒研の研究成果ではなくて，身につけてきたものを評価するやり方もあるかなと思って聞かせていただいていました。
2点目ですけれども，資料で言うと，12ページの海外派遣者の割合が，大体50％くらいで飽和しているところです。これは，全員が海外に行きますとなると，適性もあるので難しいのではないかという発言が先ほどありました。本学の場合も，なるべくたくさん行かせようと思って，多段階の海外派遣プログラムをつくっていますが，派遣者数だけ見るとい良いのですが，中身をよく見ていくと，同じ学生が何回も行っているという場合があります。そういう意味では，適性というのがあると思います。すぐ手が挙がる学生さんと，なかなか行けない学生さんの違いを分析されていたら，教えていただきたいと思います。
【西野副校長】ありがとうございます。
おっしゃるとおりで，同じ学生が最大3度も行っている学生がいて，確かにそのような形，同じ学生がこの中に含まれていますので，実際の人ベースの割合でいくと，50％を切っているというようなこととなっています。
現在はそれが途上で，そういった学生も含めて，いろいろ，楽しいから，あるいは，いろんなためになるから，自分のためになったから多分3回行ったということで，そういったこともクラスの中で，やっぱり行ってよかったよというようなことを広めてもらえれば，私どものほうはいいのかなというふうには思って続けているというところとなります。
【若原委員】分かりました。
学生さんの適性ということと，やっぱり興味を持っていただけるということが，行ってみたいという気持ちを引き起こすと思いますので，ぜひその辺，進めていただければと思います。
ありがとうございました。
【谷口座長】ありがとうございました。
一回行ったら，二度目って物すごくハードルが下がるので，随分行きやすくなるというのもあるし，いい目に遭ってくるとか，面白かったというと，また必ず手を挙げるんですよね。
あんまり最初から何々やってこいという，そういういろんな課題を与えるより，極端に言うと，遊びに行ってくればいいよという感じにしたら，もう俄然また行く学生も増えるし，次のときにはまた成果が随分上がるというようなことも随分あるので，あんまり行ったら何かというふうに思ってやり過

ぎないようにしたほうが，かえって学生さんにとっては結果としてはよくなるということも随分あるんで，最初から目標を持って，こんな研究をしたい，こんなことをやってきたいというので行くのももちろんいますけど，いろんな人がいますからね。
ただ，全然行ったことがないというのよりは，一回行って，ああ，自分たちと考え方が違うな，こういう人もいるな，世界にはこんなちょっと変わった人がいるなというのを思ってくると随分違うというか，日本の人はどうしても国内にいると単一の概念を持っちゃうんですよね。だから，そこはちょっと違う学生や考え方をする者もいるんだよというのが分かるんだけども随分違うんじゃないかなというふうに思ったりすることもありますので，そういう意味では，いろんなチャレンジは大変結構なことだと思います。
じゃ，江口委員，ほかの学校の例ももし知っておられたらそれをを含めて，少しお話しください。
【江口委員】 今，秋田高専様のほうから説明いただいた一つの学校の特徴として，この国際化の取組というのがあったわけですけれども，委員のほうからいろいろ質問あった中で，例えば，一つ，竹内委員から質問のあった，学内で，特に学寮での国際的な環境を整えるという意味では，今，高専機構の中の学校の半数近くに国際寮の設置並びに，近年は混住型寮として，いわゆるハードの面でもその環境が整ってきております。例えば，学寮内の一つの棟の中の一つのユニットに，コモンズの周りに部屋が配置されていて，日本人学生並びに留学生等が一緒に生活できるような，こういうものを順次整備してきて，受け入れる能力は大分上がってはきております。ただ，今日の発表の中にもありました，運用のところで十分生かしていけているかどうかということは，まだこれから我々としてはしっかり整えていかないといけないというようなところがあります。
あと，今日，秋田高専様の発表の中では，例えば，一度は必ずと，いわゆる100％というのがあるんですけれども，高専機構のグローバルに活躍できる人材の育成という，その考え方の下に設定している育成プログラムとしては，4つの段階を設定しておりまして，その第1ステップのところ，今日のお話にもありましたけれども，オンキャンパスでの国際化というところと併せて，入り口のところに触れられる人はやはり100％を目指したい。これは必ずしも海外に行くというわけではないんですけれども，そういったような文化を持つ方々と一緒に接して，それで最初のいわゆる外に向けての興味を喚起していく。ここについては100％％を目指すと。これからレベルを順番に上げて，4段階設定しているんですけれども，一番上のレベルでいくと，海外でほかの人と協同して一緒に課題解決をしていくようなレベル，ここは最終的には5％ぐらいを目指したいというところです。その間に幾つか，今日のお話にありましたグローバルキャンプとかも，このステップの3つ目の段階になっているんですけれども，ここは最終的には10％ぐらいですかね。手元に資料があるんですが，10％ぐらいは目指していきたい。そういうような幾つかの段階を設定して，これは予算化されたことと併せて，今進めておりますので，そういう意味では，実現が今後していくんだろうと考えております。
あと，いわゆる原級留置がない形での留学ということで，これはかなり学校の工夫が必要で，今日の説明の中にあったようなパターンが一つにあると思います。今日の文科省様の資料にもある設置基準上の，外部での学修した単位の修得が60単位まで，今現状，令和2年の設置基準の改正で認められておりますので，これをいかに学校の学務規定の中に落とし込んでいくかというのは，これから求めていかないといけないんだろうと思います。ここが実現すると，原級留置のない海外留学ということも各学校で設計できていくようになるのではないか。
実は私，以前に在籍した学校では，それを一度やって，今も，これは低学年なんですね。今日のお話は高学年だったんですけれども，低学年でそれが実現できるような体制も整えているところもありますので，これはこの設置基準の改正されたものをできるだけ活用してやっていくというのは，今後我々の課題かなというふうには考えております。
以上です。
【谷口座長】 ありがとうございます。
もっといろいろ工夫することはもちろんできるので，それをやりながら，それで留年してもいいよという形でいくという学生もいます。それは普通の留年とは違うから，僕はそういうのをどんどん進めてきたこともありますけれども，そういう子も中にはいますからね。
【松本課長】 ただ，先生，留年しないほうがベターなので。まさに2ページのところの議論，制度的な隘路のところがあれば，またちょっと御議論いただければなと。
【谷口座長】 そこは少し工夫をしていただければと思います。
それから，秋田は，グローカル人材育成会というの，これはどういうものなんですか。割とサポートしてくれるんですか。
【西野副校長】 はい。地元の企業並びに全国の企業様のほうに今お声かけさせていただきまして，

秋田高専の教育などをサポートしてくださいということで入っていただいて，現在200社以上。
【坂下校長】250社以上に。
【谷口座長】秋田はやっぱり教育県だから，そういうのをサポートしようという雰囲気があるんですか。
【坂下校長】高専の中で持っているところはたくさんあると思うんですけれども，どちらかというと，国際ではなくて。
【谷口座長】企業の方，一緒に人材育成をやっているところありますね。そういうところとぜひ一緒になって学生さんをサポートできるといいですね。そこにあんまり頼り過ぎてもいかんけど，サポートもしていただけるなら，やっていただくと大変いいかなと思いますし，学生さんが行った海外の行き先でまた別のところも御紹介いただけるということもあるかなと思いますね。
1点だけちょっと分からなかったのが，12ページのところの右のグラフのブルーのグラフが，25年から26年で下がっているやつがあるじゃないですか。これ，どういう意味ですか。これだけ，ちょっと意味が分からなかった。
【西野副校長】ちょっと訂正させていただければと思います。
これは，私のほうで作った資料としては八十何％のところだったんですけど，何か印刷上のあれだったかというような。
【谷口座長】そうなんだ。急にゼロになるのは何でかなと思って。間違いですね。
【松本課長】まだ数字が入っていないというか，そういうことです。
【谷口座長】そういうことね。
【西野副校長】まだ確定していなかったという。
【谷口座長】まだ全部の数がそろっていないとか，そういうあれだね。何か急にゼロになっているから，どうしたのかなと思ったものですから。それはそれで。どっちかというと，もうここの部分は記載なしにしておいたほうがいいね。誤解のないように。
【西野副校長】一言だけ，追加でよろしいでしょうか。
13ページのところで，私の完全なミスでございます。真ん中ちょっと下のミネベアミツミというところで，会社名を私のほうで間違えておりまして。
【谷口座長】ミネベア。
【松本課長】ミネベアさんです。
【谷口座長】ミネベアミツミさんね。
【西野副校長】訂正させていただければと思っております。発表中のところでできなくて申し訳ありませんでした。
【松本課長】公開する資料の差し替えのほうはさせていただきます。
【西野副校長】申し訳ありません。
以上です。
【谷口座長】会社の名前だからね。
いや，TDKさんとか，そういういろんなところがサポートしていっているのは大変結構なことだと思いますし，地元のためにもなるから，ぜひそういう連携をうまくしていただいて。機構本部とか国からいろんなサポートももちろんあると思いますけど，そういうこととともに，自分たちでも自立できるように，いろんな学生さんがいますから，その学生さんもいろんな家庭の事情で国際的な活動ができないとかにならないようにしてあげていただくと，とてもいい感じになっていくかなと思いますので，ぜひよろしくお願いしたいと思います。
それから，制度的に少し工夫ができるものが，いろんな規則で変に足かせになっているようなところがあれば，そこは少し御検討いただくと大変ありがたい。
【松本課長】先生，2ページのところで御議論いただければと思います。
【谷口座長】ですよね。
ということで，今のことも含めて，秋田高専の実例紹介のほうはこれだけにさせていただいて，ありがとうございました。非常に丁寧な資料を作っていただきまして，ありがとうございました。
こういうことを含めて，これから今日の議題の一つであります，高専をどんどん機能化していって，よくしていくためにはという話で，さっき2ページのところでありましたけれども，高専の教育，それから，その質を維持しながら，その特色を維持しながら，いろんな人たちが学んでいるんだから，そういう人たちをどうやったらうまく育てられるかというようなこと，留学を含めて，そういうようないろんな機会も与えながら，いろんなところと連携しながらやる，どういうふうにしたらいいかというようなこと，それが一つの議論の対象になるということがあります。

それから，今教育の話が幾つか出てきていますけど，それをうまくやるためには，どういうふうに人材育成をやっていったらいいのかというようなこと，全般的に高専の教育の高度化といいますか，国際化とか高度化とか言ったりしますけど，より前に進めて，もっといい人材，さらに，これから求められる人材を育てていくために，どういうことを考えておかなければならないのか。今，一部法律といいますか，約束事みたいなので文書に書いたものは少し工夫ができるよねという話が出てきましたけれども，そういうことを含めて，次の議論に移りたいと思いますので，今までのお話，あるいは，これまでの5回の議論を踏まえて，ここはもうちょっとこうなっているといいなというようなことがありましたら，少しその辺の議論に移りたいと思います。
今度は画面の向こうの人からいきまして，五十棲先生のほうからお願いしたいと思います。何かありましたら，全体的な意見に関して，どうやったらこうしてよくなるか，そういう観点から。
【五十棲委員】 ありがとうございます。
書いてある項目，非常に有意義な項目が並んでいるかなと思っております。
既に秋田高専さんの議論でも出てきていますけれども，単位制と言うべきかあれですけれども，当校，起業家育成とか起業家精神だみたいなことをやっておりますので，インターンみたいなものに参加したいという学生も非常に多かったりして，そうすると，5年生というよりは，もうちょっと4年生，3年生ぐらいで企業の現場に行って，どういう課題があるのかというのを知った上で，例えば卒業研究のプロジェクトに取り組むほうが，彼らの意識も高まるみたいなこともあって，そういうことをやりたいという学生も多かったり，そういうことを柔軟にやりたいと思うと，やはり単位制のような形で，4年生，5年生，あるいは3年生とかで取れる科目が一定程度柔軟性があると，非常にやりやすいというふうに感じたりしています。
また，学生によっては，入学時，特に情報工学とか，そういった分野ですと，かなり能力にも差があります。そういった場合に，低学年においても上級学年のプロジェクトに参加するとか，場合によってはゼミ活動に近しいものを1・2年生の頃から参加するといったことが，学習効果，あるいは，彼らのモチベーションが高まるみたいなこともあります。
もちろん，現行制度の中でもそういったものは特別学修とか，そういった形で認めていくみたいなことはできると思うんですけれども，必修の科目をどの学年で取るのか，そういったところが個別に学年に張りついていると，どうしてもその後の時間の使い方が窮屈になってくるということがございますので，一定程度単位制のような形で柔軟に活動ができるようになりますと，各学生の能力とか興味に従って様々な活動ができるので，非常にありがたいなと思ってございます。
また，関連する中で，ここの丸の一番下，学修単位科目のところ，PBLとか海外留学，長期インターンシップ，あるいは，実験科目とか，そういったものもあるかと思います。そういったものが，高専，授業の外の時間で学生が取り組むものが多く科目は設定されていると思います。そういったものが必ずしも全て学修課目として設定されず，上限があるという中では難しいということがあるかなと思っておりまして，こういったものの上限が，当然，内容面，いろんな部分の精査というのはあるんだと思いますけれども，学修単位，実態に合った形で上限の制約がもう少し柔軟になってくると，結果的に学生たちの時間割を組む自由度が上がってくるということにもなってきますので，そういった形が取れると，より学生たちにとって学びやすい形になってくるのではないかなと思っております。
また，ここの丸の中にないことかもしれませんが，入学後の興味・関心の変化や進路希望の変更への対応というところに関連しますと，高専，入った段階から一定程度専門が決まることも多い。最近，総合的な部分もありますが。という中で，一部の学生の中には，例えば，3年生で，国内にとどまらず海外の大学に進学するみたいなことを言う学生も出てきています。当校にも実際そういうことを言う学生はいます。
やはりそのときに，高専って何というところから説明しないといけなくて，結構苦労しております。高校卒業相当だよと言ってもあまり伝わらないという部分もあるので，高校卒業相当であるということをオフィシャルな形でレターのようなものがあったりすると助かるとか，あるいは，進学するときも，編入先，既に以前も申し上げているところでありますが，工学部の編入先は結構多いんですけれども，それ以外の部分の編入先というのは必ずしも多くないという中で，少し進路希望の部分の悩ましさはあるというところがございますので，これは文部省，あるいは制度でどうこうできることではないとは思うんですけれども，文系学部，あるいは文理融合的な学部とか，そういったところでも高専からの編入が，そもそも入学試験をやっていない大学・学部が結構多うございますので，そういったところが編入試験をやってくださるようになる環境が整うと，高専へ来た後，様々な進路を選びやすくなるという部分はあるので，そういったことができたら非常にありがたいなと思います。
それから，編入に関わりますと，単位認定という問題がどうしても出てきます。そのときに，学修科

目の上限の制約と少し関わるところですけれども，大学側と議論させていただくときには，やはり学修科目が大学ではデフォルトなので，学修科目のほうが認めやすいみたいな議論があったりします。そういう意味で，学修科目が上限が少し上回ってくるのはすごくありがたい。
あと，大学によっては4・5年生の科目を単位認定して，1・2・3年生の科目は認定しないみたいなことが多うございますが，これは高専の特徴で，1・2・3年生から専門科目，当校で申し上げると，情報工学系の科目を設定していることが多く，大学1年生・2年生で学ぶような内容を高専2年とか3年でやっていたりすることがあります。こういった科目が学修科目として設定し，大学の進学後，編入後に単位認定されるということが比較的広く周知されるようになると大変ありがたいなというところもございますので，制度ではなく実務的な部分もございますが，そういった環境が整ってくることが非常にありがたいなと思ってございます。
長くなりましたが，以上です。
【谷口座長】 ありがとうございます。
いろんなことの説明も，ちゃんとこれから大学とかいろんな社会に対してももうちょっと丁寧にしていかないといけないということもあると思いますし，十分そういうことを既に御理解いただいているところも多分あるんですよね。だから，その辺で単位制とか，そういうようなものを上手に，単位制にしてしまうのではなくて，そういうものもちょっと入れ込んで，フレキシブルなところで，どうやったら学生さんが育っていってくれるのか，どういう学生さんを育てないといけないのかというようなことを含めて，その辺の，制度と言うほど大げさじゃなくても，約束事みたいなところを少し柔軟にということをやるだけで，随分違うのではないかなという気はしますけどね。その辺の今おっしゃっていただいたいろんな工夫があると随分違うよというのは，非常によく分かる感じがしますので。
【松本課長】 先生，1点よろしいでしょうか。
今，五十棲先生からお話のあった3年次修了後の高卒相当というところの話なんですけれども，資料の3ページ目を御覧いただければと思います。これは先ほど教育資格枠組みを決めているというところで，赤くハッチングさせていただいているんですが，特に国立の高専だと運用事例は多いのではないかと思うんですけれども，3年次修了時には，各高専のほうから3年次修了証書というのを出していただく形になっていまして，これをもって国内では少なくとも高卒相当ということになるということなので，そういった運用も実際されているので，やっていただければ。
多分，先生方のほうが実情は詳しいのではないかと思いますが。
【谷口座長】 多分，説明したらそんなに難しい話じゃなくて，割と理解してくれるんですよ。外国なんか，ごたごた言わないで，はっきりと言ったら，割とちゃんと理解しますよ。今まであんまりそういう機会がなかったんだろうと思いますけど，そういうことを今後ちゃんとやっていけば，国際化していく中では，しっかりと説明していかないといけないというか，御理解いただかないといけないというところがあるのかなというふうに思いますね。
【松本課長】 また，今日の議論で，高校はもう既に単位制高校があり，大学は当然単位制でございまして，高専は，創立以来の経緯で，がちっと学年制という形に今現状なっているんですけれども，今日の御議論でも少し緩められないかという御議論いただいたので，そこは今回報告書のほうで留意して書いておく。
【谷口座長】 少し記載させていただいて，御理解いただくようにと。これ，どういうことなんですかと，聞かれたときにもうチャンスですから，いろんな説明できますからね。そうやっていって正しく理解いただくということを少し工夫していけば，随分変わってくると思います。いろんな課題があることは分かって，浮き彫りになってきたから非常にいいのではないかなという感じがします。
ありがとうございます。五十棲さんのおっしゃるようなことを含めて，いろいろと検討させていただければと思いますので，よろしくお願いします。
若原委員，何かありますか。
【若原委員】 豊橋技科大，若原でございます。
私も五十棲委員と同じような感じで考えておりました。現行制度で，現場の先生方は相当苦労されて，いろんな取組を入れられています。これを学生さんにも取りやすい形で後押しをするということであれば，一定数までの科目を単位制に設定できれば，優秀な子は3年生で5年生の科目を取ってもよいとか，あるいは，長期のインターンシップに行っている間に身につけてきたものも，何を身につけてきたかを評価した上で単位を認定するということはできますので，外に出てインタラクティブな経験を重ねるということと，能力のある子にとっては先取りができることになります。そういう意味で，伸び代のある子にとってみたら，どんどん伸びていけるというものがつくれるのではないかなと

思っております。
あとは，入学後の関心が変わったときの進路変更への対応ですよね。これはなかなか解がないと思うのですが，カリキュラムが違うから分からないのですけど，1年生，2年生ぐらいから普通高校に戻るという道はつくれないんでしょうか。
いや，私の同級生で実際に会ったケースです。入学して半年で高専を退学して普通高校に1年後に入り直したというのがいまして，入ってみて初めて分かったということで，これは私の目指す道ではないということで進路を変えますと言って，バイバイと行きましたけど，そういう道があってもいいのかなというのが長年感じているところです。
【谷口座長】 簡単そうで難しそうでという，ちょっと何とか工夫と科の必要性もありますね。
【若原委員】 普通科に転科というか転校みたいな制度があるといいかなと思ったりします。
【谷口座長】 フレキシブルに，とにかくもうちょっと自由に行き来できるというか，そういう感じというのもね。もちろん，全部じゃないけど，1%ぐらいは進路変更を希望する方はいないとも限らないから，そういう人を駄目だという感じではなくて，救うと言うと言葉はよくないかもしらんけど，別の道を行けるような，その人をやっぱり育てるという観点からは，フレキシビリティがあったほうがいいかなという，そういうことですよね。
【若原委員】 はい，そういうことです。
【谷口座長】 ありがとうございます。
【若原委員】 以上でございます。
【谷口座長】 じゃ，今度はこちらのほうで，小島先生から意見が何かあればお願いします。
【小島委員】 ありがとうございます。サレジオ高専の小島です。
入学後の興味・関心の変化という点ですけれども，本校，今の1・2年生は情報科なんですが，3年・4年・5年はまだ4学科の学生がいます。それで，まず低学年で少し興味がないとなった場合，もちろん定員で空きがないといけないんですけど，例えば，デザインとか，電気とか，違う分野を少しやってみませんかという形で，すぐにほかの学校に行くとか，今は大体通信のほうにどんどん流れていっちゃうんですけど，すぐに通信に行くとかではなくて，せっかく高専へ来たんだから，別の分野にチャレンジしてみないかというようなやり方はしています。
それから，もう1点は，これは本校，結構大きな問題なんですけど，学びのセーフティネットの確保というところで，毎年一定数の不登校の子たちが，中学のとき不登校で，高専に入ってもう一回心機一転頑張ろうというふうになるんですが，後期に入ってやっぱり出てこれない，こういう学生たちをどうやって卒業まで持っていくかというのは，学校としては大きなテーマになっております。
非常に助けていただいているのは，ソーシャルワーカーです。もちろんどの学校にもスクールカウンセラーはいらっしゃるんですけど，ソーシャルワーカーさんは，医療機関とか行政の機関とかとしっかり御家庭とかとつないでくださる仕事をやっていただくので，教員も非常に助かっているんです。ただ，ソーシャルワーカーさんの数が少ないというのも聞いていて，ぜひ，ここら辺も何かうまく工夫して，学校を助けていただける方が増えたらいいなというふうには考えております。
【谷口座長】 東京，関東周辺でも，もともとそういう資格を持った人は少ないんですか。地方に行けば確かにあんまりおられないという話はね、よく耳にしますが。
【小島委員】 はい。実は私たち，東京高専さんからうちに派遣していただいています。同じソーシャルワーカーさんが2つの高専に来てみたいな感じです。
【谷口座長】 そういう方もこれからつくっていかないといけないかもしれないということですね。
【小島委員】 そうですね。
【谷口座長】 分かりました。
【小島委員】 以上です。
【谷口座長】 なるほど。なかなか難しい。
竹内委員，どうですか。
【竹内委員】 私も，先ほど議論になっている単位制をうまく取り入れるということが一番ポイントになると思います。今おっしゃられた普通高校に戻るような学生がいたときに，単位制にしておけば，1年で習ったこの科目，2年で習ったこの科目は，普通高校に行ったときも科目認定できますと。高校はもともと単位制ですから，そういう意味で，移りやすくはなるのではないかという気がいたします。全面的な単位制がいいかどうかというのは，議論が若干あるかもしれません。
あと，単位制にすると，ストレートに考えると，飛び級とか，4年で卒業できるのかみたいなところまで考え始めると行ってしまうと思います。確かに時々天才みたいなのがいますので，もう最初から，我々が今，例えばサイバーセキュリティの若手人材育成なんかやっていると，もう小学生で大学

生と同じぐらいのスキルを持っているのがいっぱいいるんです。大学生とか大学院生と一緒にやって，プログラムをばーっと書いてやっているような子がいて，それは1年で入ってきたときに，多分5年ぐらいのものができるのがいますので，そういう学生を高専で受け入れてどういうふうにするのかなみたいなのがちょっとあるとおもいます。
そういう意味では，そういう人たちを受け入れるパスって，今，日本の学校，教育課程のどこにあるんだろうかというと，残念ながらしっかりとした受け皿がないために、何となく授業の外の夜の時間帯に独力で仕方なくちまちまと努力してやっているという感じなので，本当を言えば，中高一貫で，高専の下に中学があってみたいな高専が一つぐらいあってもいいのかなということは，個人的には思わないでもないので，私立高専ででもそういうことを考えていただけると面白いのかななんて個人的には思いつつ，そういうことを考えていました。
だから，完全単位制にして，飛び級，それから，4年卒業みたいなところまで究極考えるか，中高一貫みたいなところまでの一貫制になって，もう10代の前半からどっぷりやる世界をつくるかというのは，中期的な話としては射程に入れてもいいのかなという気がいたします。足元すぐという話ではないと思います。
以上です。
【谷口座長】 とにかく，いろんなバラエティのある感じの取組をうまくしていって，一人でも落ちこぼれなく育てられるようにという，その人の才能を本当に100％，150％発揮していただけるようなというようなことも少し頭の片隅に置きながら，いろんなことを考えないとという，そういうことですか。
【竹内委員】 落ちこぼれた人というよりは，飛び抜けた天才とか，すごく天才みたいなのが学校の中でうまく評価されて，あいつはすごいぞみたいなので，単位もスペシャルSみたいなのでいく形になっていない。そういう人たちがうまく学校の中でやれるような仕組みがどこかにあったらいいなと思っています。
【谷口座長】 みんな全ての学校がじゃなくてね。
【竹内委員】 ええ。それは無理だと思います。どこかにそういうのがあるといいかなと思います。
【谷口座長】 そういう特殊な学校があってもいいんじゃないかということですかね。
【竹内委員】 はい。
【谷口座長】 ありがとうございます。
柴崎委員，どうぞ。
【柴崎委員】 都立高専の柴崎です。
まず，学修単位はやっぱりそれぞれ自由に使える感じが増えたほうがいいかなとは思っておりますが，教育課程の中に一対一で対応する科目がないと多分いけないのがだんだん今厳しくなっていくので，外の学修を取ってそのまま単位と認定するというのが難しくなってきているので，その辺を考えると，時間割の中にちゃんと入れ込むように学修単位をしていかなければいけないという制約もあるので，そこをどうやるかというのがちょっと課題かなと思って聞いておりました。なので，低学年で展開するとなると，その辺の全体の学生たちが取れる量が決まっているので，そこをどう工夫するかというのをちょっと課題に感じながら聞いておりましたというのがまず一つです。
あと，進路希望が変化するということは，うちも対応していまして，うちは大くくりで入試しているので，1年生のときは専門を決めていないので，そこで2年生のときに選ぶので，そこは結構少なくなっている気はするんです。高専の工学の学修に向いていないというか，自分としてはやっぱり違ったという場合は，やっぱり進路変更しています。
それで，うちの場合，1年生，2年生，3年生でそれぞれ退学するときは，修了規定がありまして，うちの科目のこれは認定して，ちゃんと1年生の分は修了しましたよというのを証明をつけて進路変更して，単位制の高校であれば，その学年の次で受け入れてくれるような感じになっていますので，その辺を丁寧にやれば割と次にはつなぎやすいかなという気がしております。それは，それにしても3年生までなので，結局，4・5年はもうそういうことはないのでということですが，低学年のところは，相手の高校のところで受け入れられるような体制がこっちで証明できるかどうかというところが大事かなという気運で思って聞いておりました。
大体そんな印象ですが，多分，学外学修の一定期間を認めていくというのは，全体の学修総量の中でどう位置づけるかが結構難しくて，うちでは留学は，語学で留学したいって1年行くとなると，やっぱり休学しかなくて，休学していただいて戻ってくるというのが今，現状という感じになります。
【谷口座長】 中身によってもなかなか簡単でないところは随分ありますものね，そこのところ。その辺も大様に考えないとというのはあるけど，そう簡単ではないところも一方である。

【柴崎委員】でも，学修単位を使えば多分できるはずなんです。学修の総量があるので，それをどう入れ込むかということだと思うんです。通常の必修をあまり削ることも多分できないかなという感じであります。
【谷口座長】できることをいろいろと考えながらやっていけばということはありますよということですかね。ありがとうございます。
萱島委員，どうぞ。
【萱島委員】ありがとうございます。萱島でございます。
2ページに4つほど丸があって，調整が必要となる場合があるということですが，いろいろとお話をお聞きしていて，本当に単位制が導入されれば解決する部分が多いのかなと思いましたので，そういうのが部分的にでも導入されていくことが非常に望ましいのではないかなと思っています。
あと，もう一つ，一番最後に書かれている実践的な語学教育や海外留学の国際交流機会の充実等書かれて，どのようなものがあるだろうかというお話なんですが，先ほど秋田高専のお話の中で国際教養大学との連携の話が出ていて，私は，大学と連携するというのはとてもいいんじゃないかと思いまして。やっぱり個別の高専の中だけで全てやろうとすると，なかなかリソースも含めて大変だと思うんですけれども，各地方大学もありますし，大学も今徐々に国際化してきて，留学生もたくさんおりますので，国立大学もしくは私立大学と連携して，そのような機会をつくっていくということはすごく望ましいのではないかと思います。この上のところにも大学との共同教育プログラムとか先行履修とか書かれてありますので，いろいろそういう取組がされていると思うんですけれども，全て自前主義というよりは，そういうところも非常にいいのではないかと思います。
あと，もう一つ，若干これは何となく個人的な感想めいたものになるかもしれないんですけれども，日本社会全体も少しずつ変わってきているので，18歳でみんなが中等教育を修了しなければいけないという時代でもなくなってきて，もう社会に出ると転職が本当に当たり前になっていて，22歳で就職して60歳もしくは65歳で定年という時代でもなくなってきていますので，私は，高校生の間に，中等教育の間に1年間より多く時間を取って海外経験ができれば，そんなに貴重なことはないかなとも思いますので，社会全体がそういう認識に変わってくると，もう少し制度のありようも変わってくるのかなと。社会のほうも，そういうところは少し変わっていってほしいなというふうにも思いました。
【谷口座長】今，世の中，随分変わりつつあることは確かなんですよね。求める人材，その能力，それも随分変わってきているわけだから，そういうものをちゃんと踏まえながら，やっぱり将来に活躍できるような人をどうやって育てるかということを全体的に考える必要があります。今までのただ単なる延長ではなくて，新しいことも取り入れながらということでやっていければということになっていけば，高専の教育のようなものが，実務教育を含めて，割と評価が高いというようなことも含めて，高専が少しその辺の先鞭をつけるじゃないけど，旗振り役になれればまた違うかなという，そんな感じもしますし，お役に立つような，世の中のための人材って，やっぱりどうやったら育成できるかということを少し広い視野でみんなで考えないといけないかなということかなと思いますし，随分そういう方向で動いていることは事実かなというふうにも思うんです。
ありがとうございます。
江口委員，どうぞ，お願いします。
【江口委員】先ほどちょっと発言したことと重複しますので。高専機構の江口でございます。
一つは，今日の論点の中にあります学修単位の上限の話については，現在の上限まで，並びに特例の措置によって認められる範囲，この辺りをどういうところまで取り込んでいくかということは，実は学校現場ではよく検討する必要はあるかと思います。それがあることも前提に，さらに上限のところについて見直す余地があるのであれば，これは非常に今後の教育課程編成にとっては大きな変化になると思いますので，ここは整備されれば非常に環境は変わるんだろうというところは思います。
あと，学年制と単位制のところ，これ，実はどちらかを選ぶというのはなかなか難しいんだろうと思っておりますので，現在の教育課程編成上の学年配当が，単位制のいいところを高専の教育の中に入れ込めるような形の制度改正があれば，ここは今後の高専の，特に今日の論点の中でも課題になっているところは多くのところが解決されるのであろうというふうには思いますので，そういう方向で制度の議論をされると非常にありがたいなというのはあります。
これはまだ十分確認できていないからあれなんですが，学びのセーフティネットの確保のところと，今，完全に高専を選んでから高等学校へのいわゆる転学が全部ができないかと言われると，ちょっとそうでもない。これはもう少しちゃんと調べないといけないんですが，少なくとも前任の学校のときには，そういう例の方がいらっしゃったんですね。それは，実は高等学校がそれができるところとで

きないところがあるので，そこはよく見ないといけないんですけど，これは別の確認が必要かなと思います。
【谷口座長】細かく確認しないとあれかもしれませんね。
【江口委員】そうですね。ここは，そういうことですね。
先ほども申しましたように，特に海外へ行くための学校の単位の認定のところについては，先ほどちょっと発言のところで申し上げましたような，いわゆる高専以外の教育施設での修得単位の認定のところについては，我々学校サイドがもう少しよく実際の設置基準の運用をうまくできるようにしていかないといけないなというところはあるかと思います。
【谷口座長】ある程度学校でちゃんと責任持って内容を確認しながらやれば，できない話ではないかなというふうに思いますけどね。
ありがとうございました。
さっき言い忘れたとかがもしありましたら，よろしいですか。
いろんな議論があって，論点に関して御意見随分ありますけれども，やはり少し今までの延長上ではなくて，単位制の導入であるとか，そういうことを含めて，単位制にするという意味ではなくて，単位制を一部うまく活用するようなやり方とか，フレキシブルな形をうまく取りながら，学年制は学年制でいいところ，きちんきちんとある程度押さえていく，いいところももちろんあるんだけど，あまり律儀にそこに固まっちゃうとうまくいかない面もあるよというようなことがあります。
だから，確かにそんなに多くの人がいろいろと選択を変えるということではなかったりすると思いますけど，中にはもちろんそういう人もいて，そういう人はもう駄目なのではなくて，そういう人もちゃんと自分なりに伸びていけるようにしてあげるような制度というようなことも，今もある程度僕はできると思っているんですけど，十分そういうことも考慮しながら，ちょっとフレキシビリティを残した形でうまく組んでおけば，あとは学校のほうできちんとやっていただければやれるのではないか。これから時代が変わっていくから，今までどおりのようにがんじがらめだけでは駄目だよと。今大分変わってきているはずなので，そこのところを，悪用したら駄目だけど，上手に運用しながら，皆さんが本当に一人一人を丁寧に育てるよという方向に向かって少し整備するべきところは整備をさせていただいて，前に進んでいきながら，試行錯誤的なものもあり得るかもしれませんけど，そうやってちょっとずつでも我が国の人材育成が高度化していくように，そういう取組を進めることが大切かと思います。
それから，いろんな学校でやっておられるいい取組のいいところは，皆さん共有させていただいて，いいとこ取りさせていただく。そういうようなことがあって，ここはうまくいく，ここはうまくいかなかったけど，そういうような経験も共有しながら，あるいは，この地域ではうまくいくんだけど，こっちの地域ではうまくいかない，そういうこともあるかもしれません。そういう人材がいないんだというようなことがあるかもしれませんから，そういうことも含めて，だけども，やっぱり新しい時代に向かっての人材育成ということを，しっかりと先を見据えながら真剣に取り組んでいって，本当の人材育成の高度化につながっていくようにということをやっていければというような，そんな感じかなというふうに，今日皆さんのお話をお伺いしていて思った次第なんですけど。
今政府もいろいろと動いていると思いますし，文科省も大変苦労しておられると思いますけど，なかなか制度を変えるとか何かするというのは，そう簡単な話じゃない。いろんな見方はもちろんありますからね。そこを上手に取り込みながら，やっぱり目標とするところ，何でそれをやるかというところがちゃんと御理解いただけるような形で進めないとおかしいことになりますから，そこで一部いろんな規則なり約束事を改善するというようなことは当然あって良いなというふうに思っています。
何か文科省のほうからありますでしょうか。これだけは言っておきたいというようなこととか。
【松本課長】この後，最終報告の素案のほうの御紹介をしなければいけませんので。
【谷口座長】お願いします。
【佐藤課長補佐】議題（３）でございます。最終報告に向けての御議論をお願いできればと思っておりますけれども，資料でいくと，22ページで，素案という形で御用意させていただいてございます。
1ページおめくり続きまして，23ページに目次ということで記載させていただいてございますけれども，8月におまとめいただきました中間整理をベースに，それ以降の議論等についてアップデートしていくという構成を今考えてございます。
前回第5回までの御議論につきましては，冒頭のほうで主な御意見ということで整理させていただいてございますけれども，そういった内容を現状の素案という中に盛り込ませていただいております。
具体的には，30ページの最後の下段の326行目のところが，4ポツということで，機能強化に向けた

考え方ということで，現状，課題を整理した上で，今後取り組むべき方向性について，この4番のところで記載している部分ではございますけれども，具体的には，31ページ以降，「量的拡大」，「質的向上」，「国際通用性の確保」というようなそれぞれの柱に対して，今これまで御意見を追加でいただいた部分を赤字で修正等をしているという状況でございます。
また，本日御議論をいただきました内容につきましても，今ここの素案の中には当然反映させてございませんけれども，こちらもまた次回に向けて集約させていただきたいとは思っておりますけれども，現時点で，この構成であるとか，そのほか触れられていない部分について，もし御意見があればいただければと存じます。
以上です。
【谷口座長】 これは中間報告をベースにしながら，前回までのものの意見を少し取り込んでいきながら，さらに，次回はこれの取りまとめをやることになりますので，今日の意見をさらに加えさせていただいてということで，中間報告と同じような構成の中で，だけど，やっぱり新しい時代に向かっていろいろ変えていくところは，あるいは，注目しないといけない，考えていかなければいけないところはそれ相応に織り込ませていただいていますよということで，一応こういう原案の原案みたいなものをつくらせていただいているということですが，ぱっと御覧になっていただいて，ここの構成はこうやったほうがいいんじゃないのという意見がもしありましたら，御意見いただければありがたいです。
いいですか。今見ただけではぱっと分からないかもしれないけど，全体的な流れとしては，中間報告と同じような感じで，この報告書が非常に大事な方針を示すことになりますので，何かお気づきの点がぱっと見てあれば。もう一回ゆっくり見ないと分からないと言われるかもしれないんだけど。
竹内先生，どうぞ。
【竹内委員】 すみません。竹内です。
一つだけ気になりますのが，36ページの519から524のパラですけれども，ここで，これは喫緊の課題であるので制度整備が必要だということを書いてあるんですけれど，この文章だけ読みますと，最後が結局，検討を進めることが必要だ，検討が必要であると。だから，この有識者検討会で報告書がまとまったんだけれども，今後のアクションとして，また検討が必要になっているので，速やかに検討を行って何々を実施することが必要だと書いたほうがやる気がみなぎるというか，役所の文書で検討するというと，一時期，検討使と言われたことがあると思って，やると書いたほうがいい。「実施」するとか。あとスピード感も含めれば，どこかに「速やかに」があってもいいと思います。
【谷口座長】 分かりました。あんまり検討検討って，検討というのはもうやらないことだという人たちも多くいらっしゃるので。
【竹内委員】 もう検討はここでやったので，あとはもう具体化するのだということが1点。
すみません。あともう一つだけ。533,534のところで，さっきの3年次修了の扱いについて，適切に理解されるよう，どういう対応が必要なのかというのは，ある程度具体化しないと，結局各個人がしっかり対応しろみたいになったのでは済まないと思いますので，仕組み上，理解されるように，どういうことをするべきじゃないかということを具体化しておいたほうが，今後のためにはよろしいのではないかと思います。
その2点だけです。
【谷口座長】 具体的に何をどう書いたらいいかってありますか。
【松本課長】 学位のところの話に関しては，我々としても具体的な取組をしていこうと思っておりますので，どういう書きぶり，今この場ではあれですけれども，具体化すべきであるというような形で，検討というところで，先延ばし感のないことで承りました。
それから，適切に理解されるようという533のところですか，こちらも先ほど御説明したとおり，3年修了証書の社会的通用性を上げるというところが大事なところかと思いますので，そこを少し具体的に書くようにいたします。
【谷口座長】 そこのところを具体的に書き下ろせばいいということですね。
【松本課長】 また，今日の分の記載文を追記させていただいた上で，会議前には先生方にまたお知らせをして，次回議論をしていただくという形でさせていただければと思います。
【谷口座長】 そういうことでよろしいですか。今日の分を入れて，原案の原案のようなものを皆さんにお送りして，こんな感じでやりますよというのをお見せしようと思います。次回でとにかくこの報告書をまとめて具体化していかないといけない。
今，国も一生懸命やろうとしていますから，そういう意味では，書いてあることを十分踏まえていろいろと対応していただけると思いますし，あまり高専だけがとなってもいけませんので，そこのとこ

ろはちょっと注意しないと前に進まないということにもなりかねませんから，我が国全体のことも考えながら，高専が先頭を切ってそういう取組を始めますよという感じになっていれば，いいことであればみんな真似しようという話になりますし，いい方向に行くかと思いますけど。
ほかに何かお気づき。どうぞ，江口先生。
【江口委員】 この素案そのものではないんですけれども，このたびの検討の中では，高専教育の領域の拡大というのが入っておりまして，これまでの分野以外のところも今後検討されるということになるわけですけれども，現状，国立高専機構が設置している学校の中には，商船に関する学科がございます。ここに関しては，現状，こういう実習との関係もあって，現在，修業年限5年と6か月ということになって，工学の分野とちょっと分けているんですけれども，この辺りのところは，今回の領域拡大の全体の検討される状況においては，改めてその修業年限，関係の制度並びに法令との関係も調整する必要はあると思いますけれども，ここはまた実質の検討がされることのほうがよろしいのではないかというふうには今考えます。
【谷口座長】 それは5年半かけないでも，5年間でこうやったらうまくできるよというようなことも少し，もしできるのであればね。
【江口委員】 そうですね。
【谷口座長】 そういうようなことも少し御意見を入れていただきながらやっていただくといいかもしれませんね。
【松本課長】 先日の議論の際に，農業なんかに関しては，これから申請が上がってくるのが見えている状況で，国としても，どういう形で受け止めるかという必要性の点で，少し望ましいモデルカリキュラム的なものの検討というのを来年度，恐らくやらなければいけないかと思っているんですけれども，商船高専に関しても，お伺いしているところ，いろいろと修学年限の期間とかに関して御議論あるようなので，検討の際に併せて周知を集めて，今の御時世でどういう形が望ましいかというところを併せて検討させていただいて，将来的な制度の設計の改正といいますか，につなげていきたいなと考えております。
【谷口座長】 農業も，実験とか実習がとても多い可能性が，ほかのに比べて多いかもしれませんから，そういうことを含めて，その辺，全体的なものも考えるよということを少し織り込んで，本当にやっていかないといけないよということですね。
画面の向こうの先生方，何かありますか。大体そういう方向でいいですか。次回に御提案させていただいて，またそこで御意見いただくことになりますけど，そういう方向で原案をつくるという。
五十棲先生，どうぞ。
【五十棲委員】 ありがとうございます。
包括的にまとめていただいてありがとうございます。
1点，455行目からですか，高専教員の確実な確保というところでございます。量的拡大ということを掲げていらっしゃる中で，高専の教員は，今後，学校が増えていくと，やはりなかなか一朝に確保というのは本当に難しくなっていくと思っております。そういった中で，当校でも結構企業からの出向者を受け入れたりとか，そういったこともしておりますが，やはり企業は企業で，そういったときに何らか国からの後押しがあると出向に出しやすいよとか，そういったこともあったりもするので，もし可能でしたら，企業からの実務家教員としてクロスアポイントメントを書いていただいていますけれども，そういった高専への出向とか，授業を担当するとかいったところに財政的な支援とか，あるいは税制的な支援，その他，何らかもうちょっとソフトな支援もあり得るかもしれませんが，そういった支援，後押しがあると企業のほうも意思決定がしやすいみたいなところはあるかなと思いまして，そういった実務家教員がたくさんいるということは，高専の教育にとっても，やはり実学志向の高専ということでございますので，非常に有意義かなと思います。そういったところ，もし何か記述していただけたりすると大変ありがたいなと思いました。
以上です。
【谷口座長】 分かりました。ありがとうございます。企業のためにもなるからね。学校のほうのためにはもちろんなるにしても，企業のためにもなるよというような感じも含めて，少し考えたらいいかもしれませんね。ありがとうございます。
ほかに，よろしいですか。
今国会中で，文科省のほうが少しお時間忙しいようなので，今日はちょっと早めに終わってくださいという話もちょっとあるものですから，今日はこれぐらいに議論はさせていただいて，今の御意見を入れながら，次回までに，さっきありましたように，案を皆さんにまずは配って，また次回のところで議論をさせていただいて，最終的な報告書の内容を詰めたいと思いますので，よろしくお願いいた

します。
じゃ，次回の御説明，事務局のほうからお願いできますか。
【佐藤課長補佐】事務局でございます。
次回検討会，第7回でございますけれども，11月16日月曜日，2時からの開催を予定してございます。委員の皆様方におかれましては，御出席のほどよろしくお願いいたします。
また，議事録につきましては，これまでと同様ですけれども，事務局のほうで作成の上，委員の皆様に御確認いただいた後にホームページに掲載させていただきます。また，本日御指摘のありました箇所についても，訂正させていただいた上で，ホームページのほうにアップさせていただきます。
以上となります。
【谷口座長】ありがとうございます。
もしほかに今日何かなければ，今日のところはこれまでにさせていただきますが，15分早く終わったという形にさせていただいてよろしいですか。
では，どうもありがとうございました。今日は，長時間というより，いつもより15分短かったんですけど，長い時間ありがとうございました。特に御質問ないということですので，今日はちょっと早めに終わらせていただきます。次回，11月16日ですので，そこは一応取りまとめの会議になると思いますので，ぜひよろしくお願いを申し上げます。
今日は，秋田からもご出席いただき本当にありがとうございます。そんなに遠いわけではないですが，今後ともよろしくお願いいたします。いろんな取組，御紹介ありがとうございました。
では，今日はこれだけにさせていただきます。ありがとうございました。
―― 了 ――
お問合せ先
高等教育局専門教育課
ページの先頭に戻る
文部科学省ホームページトップへ